



## 夏の朝の清涼をたっぷり 「京朝顔」

京都府立植物園の「朝顔展」 2008. 8. 4.



今年で49回目を迎える京都半日会の「朝顔展」が京都府立植物園で8月1日から始まった。

「朝顔は早朝から半日だけきれいに咲かせ萎れる。

明日開く花は もうつぼみとして順次準備されている」といい、  
この朝顔展も開園は6時半。

誰でも咲かせられる朝顔。でも その奥は深い。

江戸伝統の「変化朝顔」に「こんな姿の朝顔もあるのか?」とびっくりした  
こともありました。

丹精こめて低い背丈に切りそろえ大きな花を咲かせる京都独特の「京朝  
顔」。淡い色が見た目にも涼しい朝顔に 大輪の色鮮やかさが清涼感をい  
っそう際立たせる。京都の義母が毎年 丁寧に育てていた朝顔である。



「家で暑がっているより、ちょっと早いが墓参りも兼ねて 朝顔見に行こうか」と朝起きして京都へ。

久しぶりの植物園 朝のすがすがしい空気の中 木陰に展示された朝顔に 夏の朝のすがすがしさをたっぷり味わ  
ってきました。



「京朝顔」 京都府立植物園「朝顔展」 2008. 8. 4.





「京朝顔」 京都府立植物園「朝顔展」 2008. 8. 4.

【 参 考 】

関東で思いつくままに 1999-2000

5. 「江戸の変化朝顔 雑草と江戸の変化朝顔」 - 『柏便り』 日本人の感性 1. -  
<http://www.asahi-net.or.jp/~ma6k-nkns/mutsu/kantou01.pdf> P10





### 5. 「江戸の変化朝顔」 —「雑草」と「江戸の変化朝顔」— 2000. 7. 19.

国立歴史民俗博物館 歴博講座 辻誠一郎氏講演より  
Asagao.htm by M. Nakanishi



7月8日 千葉佐倉の国立歴史民俗博物館で辻誠一郎氏の「古代縄文時代から現代までの植生」の話を聞きました。  
辻氏は山内丸山遺跡など古代の植物学の権威なのですが・・・ほんと面白かったですよ。  
その骨子はだいたい次ぎの通りでした。  
古代縄文の時代から現代に至るまで、その時々樹木・植物が食物として、また住居材料・生活道具等の材料として、そこに住む人達と共生し、それらとのかかわりが、日本人の感性を非常に豊かで、多様なものに育て上げた。夏の朝 みんなが楽しむ朝顔もそんなひとつ。

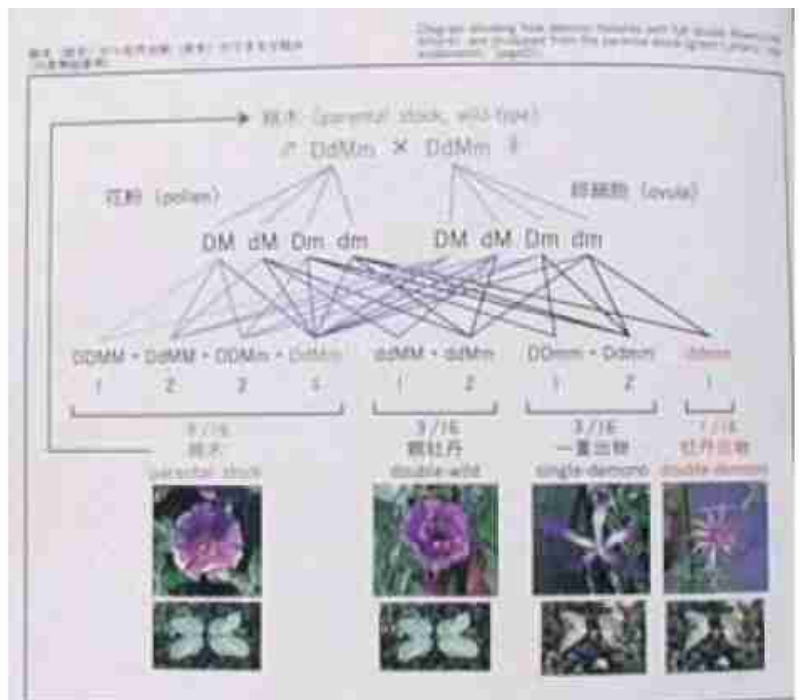
奈良時代に中国から薬草として伝わり、日本人が品種改良を続け、幾つもの種類に育てた朝顔。  
その中で、種をつけず一代限りの花の美しさを連続として伝えてきたのが「江戸の変化朝顔」。



【親木】 変化朝顔 【親株と変化朝顔】 国立歴史民俗博物館資料より

辻さんは いつも説得力があるのですが、この「日本人と植物」の関わりについての「江戸の変化朝顔」の話は日本人の「感受性・伝統の技」物作りの原点を実証する話としてもきわめておもしろかった。

この変化朝顔では幾つもの種類があるのですが、大輪の花が切り放たれ 花びらとなり、朝顔とは思えぬ美しい花を咲かせ、江戸の人達はその美しさで変化を楽しみました。  
そして、この種をつけない一代限りの花を次の年にも楽しむため、別に咲かせて準備した親の種をまき、その中から変化朝顔になる苗を分別し、同じ変化朝顔を次の年にも楽しみました。  
こうして種をつけない美しい朝顔を幾世代にも守り続けてきたと聞きました。



メンデルの法則が発表される前に経験的にその法則を知り、親株を注意深く観察すれば、常に突然変異がある確率でおこ



るので、この変異を見別け、種を取る親株と別けて、その変種だけを根気よく取出し、育てて花を咲かせる。これが「江戸の変化朝顔」。まさに物作りのプロの仕事である。



幾世代 数百年も咲かせ続けてきた江戸の人達の職人技。いわば日本人の観察眼と自然に対する深い感受性で、人手で護り育ててきた江戸伝統の変化朝顔。これが日本人伝統の技。

日本では ポピュラーな杉や松そして コウヤマキなどの温帯針葉樹は古代日本が寒冷であった頃の生残り。また、次ぎの温暖化で生まれたブナの原生林も同じ。世界的にも貴重な遺産。

これら古代の生残り組が現世の植物と共存する世界でも貴重な位置にある日本。

身のまわりにある「雑草」も縄文時代から稲と同じように人々が改良を重ねてきた栽培植物の生残り。ある時代に忘れ去られたま連綿と種を繋いで生き延びてきたものらしい。

「稲など栽培植物が途絶えた時には 人は真っ先にこの雑草に頼らざるを得ないだろう。太古の人々がそれを食としたように…」と辻氏は言う。

そう考えるとこの日本の地にある雑草も「日本人の大事な物作りの技」。

雑草のルーツを知り、「今一度きつと何処かで人の役に立つ時が来る」と考えると忘れられた雑草も素晴らしいものに見えてくる。

このような世界に類のない「太古と現代の樹木や植物の交差点」日本で生きてきた日本人。

その独特の感性の技がなしえた植物が今も「日本伝統の花」として、また「雑草」として生きつづけていること驚きです。

日本人の心 豊かな感性と鋭い監察眼がなしえた伝統の技。それは今も物作りの基本。大事にして行きたいものだとつくづく思いました。

2000. 7. 8. 千葉県佐倉市 国立歴史民俗博物館 歴博講座を聴講して

### 江戸の変化朝顔 インターネットより

朝顔が日本に入ってきたのは奈良時代の末期のこと。

当初はケニゴシ（牽牛子）と呼ばれ、薬草として扱われていた。渡来当初の朝顔は淡青一色で、小輪咲き。

その後 1000 年、変化はゆったりしたものだったが、19 世紀に入って栽培熱が高まり、多種多様なものが現れる。

ただしこの頃のものは、現在見られるような丸いラッパ型ではなく、変化朝顔。

漏斗状の花がいどむような表情を見せる獅子咲、花卉が幾重にも重なる牡丹咲、風車のような車咲などバリエーションは豊富。

現在までにおよそ 800 系統あるとか。

江戸文化年間から明治期にかけて繰り返しブームが訪れ、花が競われもしたという。